

日本医師会主催 第14回男女共同参画フォーラムに参加して



沖縄県女性医師部会委員 大湾 勤子

【次第】

総合司会：高知県医師会常任理事 計田 香子
 ○開 会 高知県医師会副会長 田村 章
 ○挨拶 日本医師会会長 横倉 義武
 高知県医師会会長 岡林 弘毅
 高知県知事 尾崎 正直

○基調講演

座長：高知県医師会会長 岡林 弘毅
 「次世代につながる生命科学とは」
 講師：京都大学大学院理学研究科
 生物科学専攻動物学教室 教授 高橋 淑子

○報 告

1. 日本医師会男女共同参画委員会
 日本医師会男女共同参画委員会委員長
 小笠原真澄
2. 日本医師会女性医師支援センター事業
 日本医師会常任理事 今村 定臣

休憩 10 分

○シンポジウム

コメンテーター：日本医師会常任理事 今村 定臣
 コーディネーター：高知県医師会常任理事 中澤 宏之
 高知大学医学部長 菅沼 成文

1. 「偶然と集いの医療環境マネジメント：高知の
 試み」
 一般社団法人高知医療再生機構 理事長 倉本 秋
2. 「若手医師が考える少子高齢時代のキャリア形成」
 研修医 児玉 佳奈
 研修医 岡村 徹哉
3. 「女性医師の現状、米国オレゴン健康科学大学、家
 庭医療科の現場から」
 オレゴン健康科学大学 家庭医療科 助教授
 大西恵理子
4. 「高知県医師会・高知県女医会の活動について」
 高知県医師会常任理事 計田 香子

○総合討論

○第14回男女共同参画フォーラム宣言採択
 ○次期担当医師会会長挨拶
 宮城県医師会副会長 佐藤 和宏

○閉 会
 高知県医師会副会長 白井 隆

「次世代がさらに輝ける医療環境をめざして
 ～超高齢者社会で若者に期待する～」をメイン
 テーマに掲げ、2018年5月26日、高知県で開
 催された男女共同参画フォーラムの内容につい
 て報告する。

基調講演

プログラムに沿って、挨拶があった後、高橋
 淑子先生による基調講演が行われた。先生は、
 脊椎動物の胚細胞の分化についての研究で世界
 的な発見をなさった方である。フランス、アメ
 リカで研究員として研鑽を積み、帰国後も北
 里大学、奈良先端科学技術大学、理科学研究所
 を経て、現職として世界的に活躍されている科
 学者である。私が理解できた範囲で基調講演を
 紹介する。

先生は、脊椎動物の発生のしくみを解明する
 ために、さまざまな器官形成や形態形成の過程
 で起こっている現象を、主にニワトリ胚を用い
 て研究している。トリ胚は、生きたままの状態
 で、目的の組織だけをピンポイントで遺伝子操
 作できるという大きな利点があるからだ。胚内
 で新たに3次元的な組織が作られるとき、し
 ばしば細胞の形態変化を伴う。細胞変化と組織
 づくりの2つのイベントが独立に進行するの
 か、あるいはなんらかの共通シグナルの元で統
 合的に制御されているのかについてはほとんど
 知られていなかった。先生は初期胚における体
 節分節を新しい解析モデルとして確立した。体
 節は骨や筋肉の前駆体であるが、初期体節の形
 成過程では、もとは一続きであった組織の中に
 次々と「切れ目」が生じ、その結果として多く

の小組織が生み出される。このとき、切れ目部分の細胞の形態も劇的に変化する。先生は、切れ目付近の細胞が、「はさみ能力」をもつことを見だし、その分子実体がエフリンであることを明らかにした。エフリンは隣接する細胞間で働く「反発分子」として知られる膜タンパク質である。エフリンによって、切れ目が作られると同時に、さらにその付近の細胞が上皮構造をとることを示した。このように組織構築（細胞集団）と細胞の形態変化（一つの細胞）を同時にコントロールするエフリンの存在の報告は世界でもほとんど例がなく、先駆的な研究と評価され、2010年には「動物の発生における形づくり研究」という研究課題で自然科学の分野で活躍した女性科学者に贈られる猿橋賞を受賞された。

このほか、分節がおこる際には決まった時間間隔があること、すなわち、分節時計なる細胞集団が存在し、分節の際に細胞内のいくつかの遺伝子が一定のリズムで発現の on/off を繰り返して分節時間を制御している事象を話された。さらに、分節の研究から神経幹細胞の研究、とくにしっぽに着目した研究も紹介された。

久しぶりに、発生学の講義を受けたような感覚で、学生の頃を思い出した。十分に内容はフォローできない部分もあったが、高橋先生の熱い語りに、研究にかける情熱と生命発生の神秘に対する好奇心が伝わってきた。また、発生生物学を通して、細胞と社会を対比させ、「細胞と組織」は「個と社会」に通じるものがあると話され、科学者として真理の探究のみならず、社会に対する役割についても述べられた。2017年4月から6月に、東京上野の国立科学博物館で企画展「卵からはじまる形づくり～発生生物学への誘い～」を開催し、企画展では最高の入場者数22万5,000人を記録した。その企画責任者として、「国民が生命の神秘に触れ、『不思議と驚き』を感じてもらえたことに安堵した」と冒頭で述べられていた。このように、研究が研究室を離れて、一般の人々にも身近に触れるチャンスを作り、特に若者の心を惹きつけるための働きかけを行っておられる。

テーマに挙げられた「次世代につながる生命科学」は、創造性豊かなオリジナリティの研究を行うことであり、そのためには知的活動を伴う強い好奇心を醸成する環境を整えることである。特に若い研究者を育成することが重要で、研究の「質」を評価できる能力をはぐくむ、流行の先に行く能力をはぐくむ、自ら切り開いていく勇気をはぐくむことを目標に大学院生の教育にも力を注いでいると締めくくられた。一方我が国の基礎研究費に充てられる予算が少ないことへの懸念も付け加えられた。

報告

日本医師会男女共同参画委員会委員長 小笠原真澄氏より、今期の活動内容について報告された。会長諮問『医師会組織強化と女性医師』についての9項目（スライド1；項目）に対して、答申の提示があった。特に若い世代への医師会の公報戦略にはSNSの活用が必要であることや地域における医師互助ネットワークを構築して代替医師派遣制度を実施していきたいなどの内容が報告された。現在、日本医師会における女性会員数は31,387名（16.8%）で2016年の都道府県医師会女性役員数は66人（5.9%）、2020年には15%への増加を目標としている。

続いて、日本医師会常任理事 今村定臣氏より、日本医師会女性医師支援センター事業（スライド2；事業計画）の2017年度の実績報告があった。病院（8,475施設）勤務の女性医師を対象に2017年8月に実施された「女性医師の勤務環境の現況に関するアンケート」の結果を一部紹介する。有効回答率は34.2%で、子育て中（小学生までの子どもがいる）の対象者は全体の38%。この集団では、1週間の実勤務時間40時間位以内は、時短・非常勤を含めても全体の3分の1、おおむね1カ月の超過勤務80～100時間が12%、100時間以上が13%で、宿日直・オンコールには6割以上が対応している勤務状況であった。育児休業取得率は2009年調査では61.5%から今回は79.4%と増えていた。夫の育児・家事参加状況は2009

年は59.7%、今回は61.7%と増えていた。一方全く協力しない率は2009年も今回も5%弱であった。女性医師が増えている中で、様々な支援を受けながら、就労が継続できることを願う。

平成28・29年度男女共同参画委員会諮問答申
「医師会組織強化と女性医師」

項目

1. 医師会の未来を担う医学生、若い医師たちへの働きかけ
2. 入会手続き、異動手続きの簡素化
3. 広報戦略
4. 就労継続支援
5. 代替医師派遣制度の構築
6. 都道府県医師会における女性医師部会の設置
7. 女性医師の医師会活動への積極的参画の推進
8. 女性医師指導者の育成
9. 女性医師支援センターの機能強化

スライド1

平成29年度女性医師支援センター事業 事業計画

1. 女性医師バンクによる就業継続、復帰支援（再研修含む）
2. 広報活動の強化(学会総会等へのブース出展・医療関係刊行物への広告掲載・女性医師バンクホームページの刷新・都道府県医師会との連携強化)
3. 「医学生、研修医等をサポートするための会」の実施
4. 「女性医師支援事業連絡協議会」の開催
5. 「女性医師支援センター事業ブロック別会議」の実施
6. 医師会主催の講習会等への託児サービス併設促進と補助
7. 「大学医学部・医学会女性医師支援担当者連絡会」の開催
8. 女性医師の就業等に係る実情把握調査の実施
9. 地域における女性医師支援活動の促進
10. 女性医師支援シンポジウム等の開催

スライド2

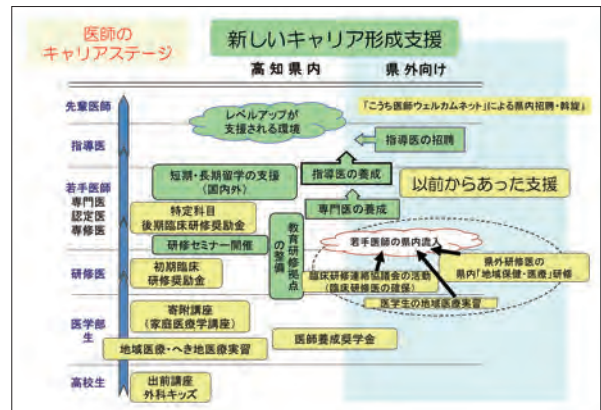
シンポジウム

「偶然と集いの医療環境マネジメント：高知の試み」

一般社団法人高知医療再生機構理事長
倉本 秋氏

高知県は、平成20年には40歳以下の医師数の減少が全国で2番目に多く、医師不足が医療現場で大きな問題となっていた。特に若手の医師不足は、地方では全国規模の問題である。2009年に地域医療再生臨時特例交付金が全国に配布され、その財源を利用して、高知県は2010年以降、若手医師キャリア形成支援のために、高知医療再生機構が事業を請け負ってきた（スライド3;新しいキャリア形成支援）（スライド4;

公募事業助成件数)。病院を超えた若手医師の研修セミナーの開催、短期・長期留学の資金援助、県外から指導医を招聘、また学会参加費や書籍・文献購入などの資金援助を実施しており、医師のみならず、看護師、コメディカルも含めた医療従事者が、高知を基礎に、日本で一番の生涯学習、キャリア形成を行える環境を整える試みを続けている。その成果があらわれ、研修医のマッチ数は2009年から2016年には1.5倍に増加し40歳未満の医師数も2016年から増えた。医師数のみならず論文数も年々増加し、また地域医療研修の目的で都心の大学とのタイアップも行って、高知県のアピールがなされている。県内外の高知県出身の医師、研究者を「こちらの医療 RYOUMA 大使」としてリストし、全国に発信している。これまでの様々な取り組みを紹介しながら、今年は新規に「高知家総合診療専門研修プログラム」を開設し、講師の語る高知県の医療環境の「美しい局所最適」を持続する努力を続けている。



スライド3

一般社団法人 高知医療再生機構 公募事業 助成件数

事業名	平成22年	平成23年	平成24年	平成25年	平成26年	平成27年
指導医資格取得支援事業費補助金	10	16	21	27	18	14
指導医招聘支援事業費補助金	0	0	0	1	0	0
専門医育成支援事業費補助金	25	29	37	40	47	52
専門医実習向上支援事業費補助金	0	19	24	20	20	19
医師留学支援事業費補助金	6	2	6	3	5	5
(新規) 医師留学支援事業費補助金【後期研修医特別枠】	0	0	0	1	0	2
専門医等不足分野支援事業費補助金	7	8	8	7	10	5
認定看護師資格取得支援事業費補助金	0	9	6	15	3	9
看護職員・コメディカル職員研修派遣支援事業費補助金	5	3	1	0	2	1
看護職員・コメディカル職員研修支援事業費補助金	4	7	6	10	5	4
	57	98	109	124	110	111

(※単位は件数)

スライド4

「若手医師が考える少子高齢社会のキャリア形成」

①高知県安芸福祉保健所 児玉佳奈氏

初期臨床研修を終え、公衆衛生医師として保健所の勤務を始めた氏である。自分が医師としてどのような社会貢献をし、また一人の人間としてどのような社会生活を送りたいのかを考える際に、少子高齢化が先行している高知県で研修したことが、医療の在り方を考えつつキャリアプランニングにできたと述べていた。高知県は県内の8つの基幹研修病院を中心に、県全体で若手医師を育成するプログラムがあり、施設間の垣根が低いので、幅広い分野で研修ができ、それぞれの場所で多種多様な働き方を見聞きすることができた。ご自身は、公衆衛生の分野で医師として後輩を支援していかれるようである。

②高知医療センター初期研修医 岡村徹哉氏

2004年、臨床研修の必修化、マッチング制度の開始により、研修医たちは、自らの望むところで医師の資質を磨くことができるようになった。本来研修の理想であるはずであったが、研修医が都会に集中するようになり、地方の医師不足が深刻化し医療崩壊という言葉が聞かれるようになった。その最中、高知で臨床研修をしている研修医たちが、自分たちで最良と思える研修環境を自分たちの手で創っていくことが、仲間を増やす一番の近道であり、さらに医療の質の向上につながると考え、高知から理想の研修環境を創っていくホームとして2010年コーチレジを立ち上げた。その資金は高知医療再生機構から支援を得ている。このコーチレジの働きは、県内外から多くの研修医が訪れるきっかけを作り、診療のみならず人的交流の活性化をもたらし、指導医も数多くの研修医に接してさらに指導能力を上げることができている。岡村氏も県外出身者であるが、高知研修システムの中で育った医師として新専門医制度をむかえる。コーチレジは、自ら考え、創っていく仲間の組

織であり、そこで関わった体験を通して今後新たな制度が導入されても、医療全体を俯瞰しながら研修ができるようにしていきたいと述べた。

「女性医師の現状、米国オレゴン健康科学大学、家庭医療科の現場から」

オレゴン健康科学大学 家庭医療科 助教授
大西恵理子氏

大西先生は、卒後2年間日本で研修し、その後渡米して研修を続け、2011年より米国オレゴン州にあるオレゴン健康医科大学 (Oregon Health and Science University; OHSU) 家庭医療科で臨床、教育に携わっている。講演は、日本から見学に来た女子医学生に「家庭医療科の研修医は、どうしてたくさんの方が妊娠できるのですか?」という問いかけに、日米の違いについて再考してみた、というスライドで始まった。

病院の規模の比較を提示し、OHSU 大学病院職員数は高知大学附属病院の12倍と人員が多く、マンパワーがあること (スライド5; 病院規模比較) に自身も驚いたとの事であった。家庭医療科の研修医は12人/年と常に人数が確保されているため、研修プログラムには休暇、欠勤の規則はあるが、余裕を持たせたプログラム作りがなされている。また欠勤した研修医の業務をカバーする研修医が、毎日当番制で設定され (Jeopardy システム)、心身ともに安心して仕事ができるようになっている。最初の質問に戻ると、家庭医療研修プログラムでの過去10年間統計では、家庭医療科の女性研修医は約62%を占め、研修中に妊娠する女性は約23%、父親の育児休暇取得は約27%となっており、男女ともに約25%の研修医が、産休や育児休暇を取得していた。人員のゆとりと Jeopardy システムの整備、そして出産、育児を人生の大事なイベントとして支える上司や同僚の理解があることが、出産、子育てがしやすい環境となっているといえる。ただし、休暇取得期間、研修プログラム内での必修履修項目は

決まっています、duty を果たさなければ再履修となるルールも確立している。

病院規模比較	OHSU Hospital (2017年)	高知大学医学部附属病院 (2014年)
職員数	1万5958人	1309人
病床数	576床	605床
患者来院数	109万 8517人 (入院、外来)	24万 7247人 (外来患者)
	91万9642人 (外来患者)	
職員数/病床数	27.78人/床	2.16人/床
平均在院日数	家庭医療科入院 目安3~5日	16.2日

スライド5

「高知県医師会・高知県女医会の活動について」

高知県医師会常任理事 計田 香子氏

高知県医師会として、医学生へ男女共同参画や地域医療をテーマとした講義、医学実習のアドバイザーとしてかわり、研修医へオリエンテーションや講習会の企画、また婚活支援なども行っている。また、1940年に高知県の女性医師25名で発足した歴史ある高知女医会のご紹介もあった。本会会員は、開業医または民間病院の医師が多いが、定期的な親睦会、機関紙

{杏桃} (年1回、今年64号) 発行などの活動を継続している。

各演者の発表に続いて総合討論がなされた後、第14回男女共同参画フォーラム宣言が採択された(スライド6)。

次期担当は宮城県医師会で、2019年7月27日開催予定である。

感想

幕末から明治維新の時代に、日本を動かした人々が、市内の道沿いにパネルで紹介されていた。歴史を伝え、先人を誇りに思っている高知の風土を感じた。

そして今回の男女共同参画フォーラムでも、若い医師たちが、自ら「良い研修環境を創り、将来の医療も創る」という気概を、高知から発信して、高知医療再生機構という有効に機能している組織の存在で、成果をあげていた。少子高齢化社会の中で、「局所最適」となる取り組みが、全国に広がることを期待し、創造性のある若者をはぐむ努力を私どもも続けていきたいと思った。

第14回男女共同参画フォーラム
宣言採択

少子高齢化が進んだ我が国において、特に地方での医師の高齢化、医師不足、地域偏在、診療科偏在は、国民が十分な医療を受けられないという危機を引き起こしており、現在その対策が急がれているところである。

女性医師の割合は増加しており、その活躍をいかに支援するかが重要であることはもはや共通認識となっている。しかし、女性医師を取り巻く環境は改善してきている一方、意識改革についてはこれからも時間をかけて取り組まなくてはならない課題である。多様なキャリア形成を支援するには医療にかかわる全ての人々の理解が不可欠であり、早期からの教育や啓発が必要である。そして、男女の差なく若手医師が将来に希望を持ち、それぞれの地域でやりがいのある勤務環境を創ることが求められている。

私たちは、医療界においての真の男女共同参画を実現するべく、男女の相互理解のもと豊かな心を持ち、多様な価値観を受け入れ、真摯に学び続け、医療のあるべき未来を逞しく切り拓く人材を育成する体制作りを進めることをここに宣言する。

平成30年5月26日
日本医師会 第14回男女共同参画フォーラム

スライド6